



Title	Polypharmacy at admission prolongs length of hospitalization in gastrointestinal surgery patients(内容・審査結果要旨)
Author(s)	阿部, 夏樹
Citation	
Issue Date	2021-03-25
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1389
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2021-11-05T05:08:15Z

論 文 内 容 要 旨

しめい 氏名	あべ なつき 阿部 夏樹
学位論文題名	Polypharmacy at admission prolongs length of hospitalization in gastrointestinal surgery patients 消化器外科患者の入院時のポリファーマシーが入院期間の延長を 引き起こす
<p>【目的】 高齢者のポリファーマシーは社会問題となっており、薬物有害事象だけでなく、転倒、機能障害、認知機能低下も引き起こすことが報告されている。これらの事象は入院期間の延長を引き起こす可能性がある。したがって、本研究の目的は、ポリファーマシーが入院期間の延長に影響を及ぼすかを明らかにすることである。</p> <p>【方法】 本研究の対象者は、日本の大学病院で肝切除術、膵頭十二指腸切除術、胃切除術、および結腸切除術のクリニカルパスが適用された 584 名の患者である。本研究では、ポリファーマシーを入院時に 5 剤以上の定期的な内服薬を服用すること、また入院期間の延長をクリニカルパスで決定される入院期間よりも長い入院と定義した。ポリファーマシーが入院期間に影響を与えるかどうかを調査するために、多変量ロジスティック回帰分析を行い分析した。</p> <p>【結果】 対象者は男性 348 名、女性 236 名で、平均年齢 (SD) は 65.8 歳 (±12.9 歳) でした。ポリファーマシー群が 228 名 (39.0%)、入院期間の「延長」群は 262 名 (44.9%) であった。</p> <p>多変量ロジスティック回帰分析により、以下の変数が入院期間の「延長」と有意に関連していることが明らかになった。ポリファーマシー (OR = 1.532 ; 95%CI = 1.010–2.327)、年齢 50-59 歳 ; 2.971 (1.216–7.758)、年齢 60-69 歳 ; 2.405 (1.059–5.909)、膵臓 ; 0.298 (0.122–0.708)、手術時間 ≥386 分 ; 2.050 (1.233–3.432)、術中出血量 ≥401 ml ; 2.440 (1.489–4.038)、術後せん妄 ; 2.395 (1.240–4.734)、術後感染症 ; 10.715 (4.270–33.059)。</p> <p>【結論】 本研究では、入院時のポリファーマシーが入院期間延長の独立した要因であることが明らかになった。今後、外来診療、かかりつけ医、調剤薬局などと連携し、地域を含めたポリファーマシー対策が求められる。</p>	

(Geriatrics & Gerontology International, 2020 年 9 月 22 日、DOI: 10.1111/ggi.14044)

学位論文審査結果報告書

令和2年2月13日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏名 阿部夏樹（衛生学・予防医学講座）

学位論文題名 Polypharmacy at admission prolongs length of hospitalization in gastrointestinal surgery patients

本論文の内容は、本学の消化器外科病棟における手術患者さん 584 名を対象とした Cohort 研究であり、入院時の Polypharmacy (5 種類以上の服薬) が入院期間延長に寄与する独立した因子であることを明らかにした臨床研究である。多変量ロジスティック回帰分析により、複数の患者背景因子、社会的要因、医学的要因から、入院期間延長に寄与する因子を統計解析し、結論した。本研究から、今後、外来診療、かかりつけ医、調剤薬局などと連携し、地域を含めた Polypharmacy 対策が重要であることが導かれた。

審査会の質疑応答において以下の議論がなされた。①服薬数で定義しているが、服薬の内容や薬物の種類で検討されているか、②他臓器疾患でも同様の傾向が認められるか、③若年の因子でも入院期間の延長が認められるは何故か、④退院に向けての具体的な Polypharmacy 対策は何か、など活発な質疑応答がなされた。

上記に関し、申請者は適切に応答し、今後の改善点、方向性を把握し、十分な見識を有すると判断できる。さらに、本論文は国際専門雑誌 *Geriatrics & Gerontology International* (IF=2.02) において Peer review を受け、論文として Accept されている。

本臨床試験の研究方法与データ解析は適切であり、学術的意義を有するとともに、一般臨床に貢献できる内容である。論文内容は、論理的に展開されており、独創性を有し、本学における医学専攻（博士課程）の学位論文に値すると評価できる。

論文審査委員 主査 消化管外科学講座 河野浩二
副査 肝胆膵移植外科学講座 見城 明
副査 病態制御薬理学講座 三坂 眞元